



商 ひ 遊

高崎第二幼稚園

はしがき

活動力の盛な子供には、何かしらやらずには居られない。見るもの、聞くものみんな、彼等が活動の資料である。大人の生活は、すべて遊戯として模倣される。よくしたものだ。かくして心身が發達し、社會的生活の芽がのび、大人の生活を理會するのたすけとなる。かのまゝごと遊、ち客遊、商ひ遊など皆それである。これ等の劇的遊戯を有効に指導することは、子供の教育にとつて重要なものであることは云ふまでもない。

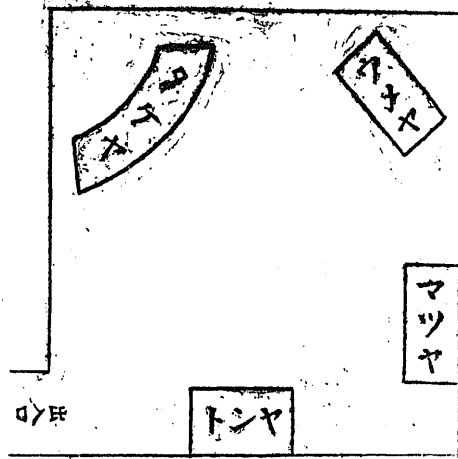
我が高崎市として、歳末大賣出しの市場生活をかたどり、之を劇化して幼稚園にとり入れようと

したのが本研究の題目である。五人や七人の小さな團隊に於て、木の葉や茶碗のかけら、どろまんぢうなどを以ての商ひ遊は常に見るところである。しかし百人以上の團隊に於て幾分、組織的にやらうとすれば幾多研究すべき問題がある。いまこゝに自分等の小さな試みをのべて批正を仰がうと思ふ。

その實際

遊戯室を市場に見立て、モール、輪つなぎ、テーブル等の満艦飾の下に三軒の模擬居が圖の如く設けられた。松屋には羽子板、文化人形、起し繪、汽車、うば車、粘土細工、カード等數百點の商品

が陳列され、店飾りとしてはかち／＼山の兎船。
梅屋は主として繪本、クレオン、鉛筆、繪紙(切ぬき用)畫紙、繪はがき等約三百點にして、店飾りに



は人形、蓄音機等。竹屋は少しく模様をかへて、
軍艦、ボート、魚類、野菜類、メンコ、キシヤゴ、
雑穀、花うちらは、風車、風船等が陳列され裝飾と
しては舌切り雀のお人形が飾られて居る。どの店

にも ○一セン ○二セン ○三セン 等と
標記された定價票が掲示され、肩章をつけた可愛
らしい小店員が、三四名づつ、お客を迎へて居る。
なほこの室の他の一方には問屋場が設けられ、か
くて市場の準備はと／＼なうた。

一方保育室は一つの文化村ともいふべく、一室
に三四戸位の家族が机を組合せて團欒の生活をし
て居る。毎戸に小さなお母さん、もしくはお父さ
んが、一圓づつの貨幣を預かつて家計をとつてゐ
る。——貨幣は私共が特に作ったもので、ボール
紙製一錢・五錢・十錢の三種。一錢は赤色一寸二分
圓形。五錢は綠色八分、十錢は銀色一寸、共に圓
形にして中心に鳩目を打ちしもの。その分配は一
錢五十枚、五錢六枚、十錢二枚、計一圓を各家庭
に交附し、外に各商店には五十錢づつ、問屋には
三圓の準備金を交附しおく。——文化村の村長さ
んはいふまでもなく保姆の先生である。かやうに

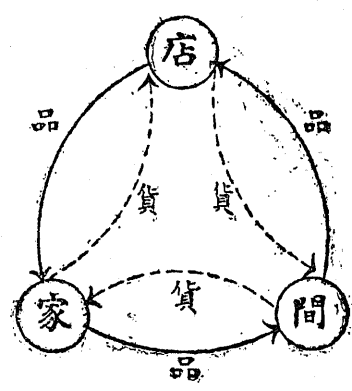
してすべての準備はととのひ、開店を待つ。

カチ〜〜。開店を待ちかねて突進する元氣ものもあれば、買物に弟をつれて行くやさしい姉さんもある。しまつなお母さんは財布の口を引しめて代る〜買物に出す。中には度々、あしをねだつて叱られる子もある。「お前はそんなに買つてばかり居れば追ひ出してしまふぞ。」といふ嚴格なお父さんもある。十人十色の個性を發揮して、しかも楽しい家庭生活が遺憾なく實現される。各商店ではお愛想よく、「いらつしやい！」「何をあげます？」「ありがたうございました。」など〜美しい小さな社會劇が演ぜられる。

一しきり買物がすむと、商店は幾分すきになつて来る。品物も少なくなつて来る。一方各家庭では玩具を持つて遊ぶもの、繪本をひろげてはなし合ふもの、繪をかくもの、キシヤゴを弄ぶもの、ましごことを始めるもの等いくつのかのかたまりに分

かれてにぎはふ。

やがて各家庭では、あしが缺乏して来る。買つた品物には、あしが出て来る。そこで各家庭の姉さん株兄さん達がこれ等不用品を一括して問屋にかける。こゝに問屋の機能が開始される。問屋は不用品を買入れると同時に、商店に向つて卸賣をして商品の不足を補充する。かやうにして問屋を



中介とし、貨幣を介して品物は商店、買入、問屋と圖の如く轉々として循環する。即ち興味をつきさる限りいつまでも商ひ遊は繼續されるわ

けてある。
やがて終りが近づくと各商店は賣出しを中止し

商品の整理にかゝる。各家庭は買入品全部を問屋に送りて金銭の回収につとめ、各商店は問屋より商品の回収をなす。かくてこの遊は自然に終局をつける。若しこの整理に於て、資金及商品の回収に誤差が少なければ少ないほど收支に於ても成功したものだといふ事が出来るのである。これが私共の試みた模擬店の實際である。思つたより子供等は大人しく、買物もしお遊びもして混雜もなく間違も少なかつた。

以上は普通の商ひ遊であるが次に特別な催しとして「十銭會」といふのを演つて見た。その大要をのべて見よう。商店の組織は略々前の通りであるが、買方には一人前十錢づゝのおあしを與へて自由な買物をさせ、そのまゝ年末の贈り物とするといふ趣向である。従つて商品に於て或物は全兒の數だけ、或はその半數位といふやうにそれ／＼の見込をつけて豫定的に調達しておかなければなら

ぬ。私共の準備した品物は後の表の通りである。

なほこの外に食堂を開き、その一部に餘興場（蓄音機、玩具等）をも設けた。食品には甘いお湯（一杯一錢）、キャンデー及キャラメル（組合せ一錢）、鹽せんべい（一袋一錢）の三種を準備した。何せよたく山の品物の中から選擇して直段と引合せ有效な買物をしようといふのですからなか／＼大抵のことではない。先づ一巡して買物の豫定を立てさせる。尤も食堂には大體の制限を設けたし、又一人一度に一つ店では一品しか買はない内規をも定めたのであつた。

いよ／＼開始となると、我さきにと食堂にはいつて動かぬものもあれば、豫定通りの買物をずんずんと行くものもあり、おあしを握つてなか／＼買ふことの出来ないものもある。買つた物を前にならべてにこ／＼してゐるもの、それ等をおもちやにして遊んで居るもの等、何れも嬉しさうな様子に私達もほんとうに喜悅と幸福とを味つた。永

く苦心し計画したこの仕事もかくして報いられた。

参考のため十銭會の商品及收支の状況を表示す

れば。

松屋 賣上現金貳圓參拾五錢

商 品	數 量	價 格		備 考
		(單) 錢	賣上金	
羽子板(羽ツキ)	壹	三九	一、二七	
文化人形	二	四	八	
こま	六〇	三	一、八〇	
汽 車	五〇	一〇	一、〇〇	
乳 車	二	一、六	一、〇〇	
起 算	三六	三	一、〇八	幼兒製品
合 計	三三二	二六	二、四九	誤差 一四

竹屋 賣上現金壹圓八拾八錢

花うちわ	一三〇	七	九、一〇	
打ぬき繪	三〇	二六	七、八〇	
軍 盤	三三	一	三、三〇	
幼兒製品			二、六	

ボート	三	三	九		幼兒製品
風車	三	三	九		同
粘土工	四	六	二、四〇		同
粘 土	四	六	二、四〇		同
メシ	六	〇	三、六〇		同
繪はぎ	六	〇	三、六〇		同
キシヤゴ	九	元	五、四〇		同
合 計	三三	〇	二、〇〇		同
誤差			一、〇		誤差 六

梅屋 賣上現金壹圓九拾壹錢

繪本	一〇	九	九、〇〇		
月に兎(つなぎ方)	四	六	二、四〇		
風船	一〇〇	三	三、〇〇		
クレオン(毒紙ツキ)	()	()			後=問屋=テ引かへ
鉛筆	()	()			同
合 計	三二	一	一、〇		誤差 一八

食堂 賣上現金貳圓八拾貳錢

明細なる計算をなし得ざりしを遺憾とす。

備考

一、當日(十二月二十一日)の出缺席

出席數 八十九(來客二名) 計九十一人

缺席數 二十八(感冒流行のため缺席通常に比し多かりき)

二、收支決算

交附したる貨幣 九圓拾錢

回收したるもの 九圓貳錢

三、經費の出所及殘品處分

商品購入のため約拾七圓を「子供のための會」——所謂後援會——より支出し、殘品の一部は缺席幼兒に分配し、一部は買入店に返送し、其他は模擬店の商品として保管する筈なり。

むすび

所感をのべる代りにこの遊戲に關聯して小供等の間に起つた小話をのべて稿を結ばうと思ふ。

○梅の組の○○○さんは、翌日、みんながおもしろかつたお話をするのをションポリときいて居ました。いつも元氣なのに、それで私もすぐ

氣がつかました。「まアちゃん。昨日お休みしたね、今日歸へりにはまアちゃんの好きなものを上げますよ。」といつて顔を見たら、涙を一ぱいためて嬉しさうに笑ひました。——私もつひポリとしました。——そして「まア坊は香氣な父さん——粘土細工——が欲しい。」といひました。

○松の組○○○さんは前日(普通の商ひ遊)クレオンを買つて繪をかいたところが大そう上手に出來て、先生にほめられた(ふだんは目立たぬ兒)ので今日もまたまつ先にクレオンを買つてタッタ一人夢中で繪をかい居ました。先生から早く行つて買はないといひものが賣り切れになりますよと注意されて買つて來たものは繪はがきに鉛筆でした——この點をきつかけとして善導したいものです。

○同じ組の○○○ちゃんは食堂で盛んにコーヒーを呑んで居ました(お代りまでして)が、おせん

べいの袋をかゝへて妹にお土産にするのだといつて居ました。

○羽子板をかゝへた竹の○○○○ちゃんは、心配さうに先生の側へ来て「今日はこれお家へ持つていつても大丈夫？」とたづねて、先生が「大丈夫ですとも。」と答へたのでホツとした様子でした。

○梅の時計屋の○○○○さんは朝から「今日は本を二つ買って一つは(弟)○ちゃんにおみやげ、妹には赤いこまを買つてやるんだと楽しんでゐました。

○買物中一人の子供が五錢のおあしをなくしましたと届け出ましたので、いろいろな事を考へて心配しました。その子供には代りのおあしを上げておきましたが、間もなく、五錢のおあしを拾ひましたと届け出た子供がありましたのでほめてやりました。

○松のお○ちゃんは前日から「お月さまと兔」の輪つなぎに目をつけて居ました様でしたが、當日は何よりさきにそれを買ひました。

○竹の組の御大○○さんは「家へ歸つて見せたらお父さんが『毎月五錢づゝ出してゐるのだから—子供のための會費—この位のことかなけりや損だ』といつた。」と話しました。

○松の○○○○さんはいろいろ買つてお机の上にならべて嬉しさうに「先生私はね、キャラメルも一つも食べないでお家へもつて行つて母ちゃんに見せるの。」といひました

○お部屋でキャラメルやおせんべいを食べて居た子供達は夢中で買ひに行くのも忘れて居たものもありました。

(をはり)

x

x

x

x

x